

藤中 寛之

折尾と言えば、堀川の五平太舟や日本初の立体交差駅である折尾駅に代表されるように、筑豊の石炭を八幡製鐵所に運んだ交通の要所というイメージが強いと思います。しかし、水巻町との境界には、日炭高松第2鉱のボタ山があり、日吉台3丁目は炭住跡地に造成されました。そのため折尾は、鉄の街・北九州市八幡の交通の要所であると共に、遠賀川の流域に位置する筑豊地方の旧産炭地でもあると思います。

1960年代、石炭から石油・天然ガスへのエネルギー転換が起こり、日炭高松第2鉱を含む多くのヤマが閉山に追い込まれました。九州の地底から、日本の近代化と戦後復興を支えた多くの炭鉱労働者たちが職を失い、産炭地の地域経済に壊滅的な打撃を与えました。

2011年現在、福島第一原子力発電所の重大事故を契機として、一般の人々の間でもエネルギーのあり方に対する関心が高まっています。有識者を含む市民討論会では、発電の際の安全性やコスト、電力の安定供給の問題などを踏まえ、火力や原子力、風力、太陽光などによる発電のメリット・デメリットが議論されています。そこで次々に、既存の電力供給体制の問題点が明らかになり、発送電の分離による真の電力自由化や全量固定価格買取制度の徹底による自然エネルギーの普及、ITの活用による効率的な電力供給の必要性などが提起されています。

一方、この重大事故の約1年前から低炭素社会を目指している北九州市は、新日本製鐵(株)や(株)安川電機、(株)日鉄エレクトロニクスなどの参画企業と共に、八幡製鐵所の広大な跡地がある八幡東田地区にて「北九州スマートコミュニティ創造事業」を推進しています。この事業のポイントは、エネルギーの供給側と需要側の間に、市民や事業者が「考える」「参加する」仕組みである「地域節電所」を設置し、運用することです。

その「地域節電所」の機能として、①太陽光発電や風力発電、隣接する工場群にある副生水素や廃熱も活用する「地域エネルギーを発見・導入」すること、②地域にある「エネルギーを共有化」すること、③エネルギー情報の「見える化」やエコポイントシステムなどによって、電力の消費者にコスト意識（経営感覚）を持ってもらうこと、④電気自動車が大量に普及した場合の充電システムや課金システム、公共交通機関との連携システムを構築することなどが提起されています。

北九州市と参画企業は、このように地域住民が新しいエネルギー利用を体験することによって地域コミュニティの再生が図られると共に、大幅な省エネルギーやCO₂削減がなされること。更に、市と参画企業は事業を通じて得た技術で、100兆円超の市場規模といわれる全世界の「スマートシティ市場」を先導し、国の新成長戦略を具体化すること等も視野に入れています。

かつて私たちが住む折尾は、日本の近代化と戦後復興を、石炭というエネルギーで支えてきました。今、時代は、石炭や石油、原子力から、太陽光や風力などによる自然エネルギーに大きく舵を切ろうとしています。まさに、農業革命、産業革命、IT革命に続く、第4の自然エネルギー革命による大きな社会変革が起ころうとしています。この社会変革とは、お任せ主義だったエネルギーのあり方を住民にわかりやすく情報公開し、私たち一人ひとりが考え、参画して地域の自然に適した方法でエネルギーを生み出し、効率的に賢くエネルギーを消費すること。このエネルギーの地産地消を通じて、電光パネルや風車、電子機器などの地場の関連産業を振興して地域に雇用を創出すると共に、この分野以外においても市民主体のまちづくりを推進することです。

私は、折尾・八幡は人々が命がけでエネルギーを生み出した旧産炭地であるからこそ、この地域から新しい時代を切り開く、自然エネルギー革命の可能性を探求していきたいと思います。